

## 大谷大学・大谷大学短期大学部 博物館学課程

### 2005年度の活動計画

2005年度の文学部・短期大学部の博物館学課程は、前年度の反省を踏まえて立案され、資格取得課程委員会博物館学課程部会で承認された授業計画に基づき、博物館実習Ⅰ担当教員を中心に実施した。

### 博物館実習Ⅰ(学内実習)

本年度の博物館実習Ⅰ(「2005年度博物館実習Ⅰ(学内実習)授業テーマと内容」参照)は、文学部第3学年と短期大学部第2学年を中心に、大学院生・第4学年・科目等履修生を含む計16名を対象にし、まずはじめに「仏教資料取扱法」(序説)と題して、「総論」から入り、本課程の歴史やねらい、展望などにふれて、受講生に目的意識の明確化を促した。また本課程の特色である「仏教文化財」の内容を概説した。そして、受講生には「仏教資料取扱法」(序説)の内容をふまえて、「仏教文化財について」「受講生にとって博物館とは」などと題するレポート(400字×10枚)の提出を求めた。このレポート作成は、これまで観覧者の立場にあった受講生を、学芸員を目指す者として動機付けすることを目的にしたものである。

次いで、前期には、①「仏教遺物資料Ⅰ・Ⅱ」(仏教考古・仏教民俗)、②「古文書」(近世・近代史料)、③「写真撮影実習」等の講義・実習をそれぞれの担当者がおこなった。講義では知識の習得をめざす一方、実習では、実務として拓本、掛け軸、古文書などの取り扱いなどを習得させた。実習に際しては、受講生16名を3班に分けておこなった。各授業ごとに、作成した調査カードやレポー

トを必要に応じて提出させた。

夏期休暇中、夏期フィールドを7月31日(日)、8月4日(木)・8日(月)の3日間で企画し、初日に「博物館等施設見学」、2日目に「博物館資料撮影実習」、3日目に「古文書調査整理実習」という計画を立て、実施した(詳細は「博物館実習Ⅰ(学内実習)夏期フィールド」参照)。終了後、受講生は夏期フィールド参加レポートを提出した。

後期、④「真宗史料」、⑤「仏教文献資料Ⅰ～Ⅲ」では、真宗史料と東洋・日本の仏教を中心とした文献資料の講義と実習をおこなった。いずれも専門的知識の習得と取り扱い技術の習得に注意した。このほか、近年、博物館でその利用が注目されている情報処理技術と博物館の関係を認知させるために「博物館とマルチメディア」では、スタジオを使用して、講義と実習を実施した。また「博物館関係法規の概要」を講義する時間を設けた。

最終授業時には、一年間の授業の総括と、次年度の博物館実習Ⅱ(学外実習)にのぞむ心構えや、博物館実習Ⅰの復習など事前学習の必要性を説明した。

また本年も受講生が主体的にテーマをもって3館以上の博物館・資料館・美術館などを見学してレポートする課題を設けた。これは受講生各自の自覚を促すとともに、学芸員の「現場」での様子を認識させる意図を持ったものである。

### 博物館実習Ⅰ・Ⅱ合同見学会

例年、博物館実習Ⅰ・Ⅱの受講生を対象として、春秋二季の博物館合同見学会を実施しているが、本年度は次のとおりである。

春季合同見学会は4月17日(日)午後1時30分より大津市歴史博物館の企画展「近江の国府と郡衙 発掘された古代の役所」展を見学した。また秋季合同見学会は、10月15日(土)午後1時より大谷大学博物館の特別展「ファウスト 伝説と作品」の見学と、同展特別講演会「舞台にみる『ファウスト』」(学習院大学名誉教授 岩淵達治氏)を聴講した。それぞれ受講生は見学あるいは聴講した内容をレポートにまとめて引率教員に提出した。こうした見学会の機会は、上記の夏期フィールドでの施設見学と各自でおこなう年間3館以上の見学、そして春秋二季の博物館合同見学会と、少なくとも4回設けている。

### 博物館実習Ⅱ 事前ガイダンス

本年度の博物館実習Ⅱ(学外実習)の参加に先立ち、6月22日(水)16時10分より1号館1210教室で「博物館実習Ⅱ」受講生を対象とした「事前ガイダンス」をおこなった。概要は次のとおりである。

#### 基調講演「博物館の状況と展望」

京都国立博物館文化資料課

保存修理指導室長 赤尾 栄慶 氏

#### ガイダンス「博物館の普及活動」

大津市歴史博物館

学芸員

山崎 和宏 氏

最初に本課程の「博物館概論」を担当していただいている赤尾先生から、表題のテーマについて、具体的な事例をふまえてさまざまな問題を指摘された。また学外実習参加を目前にした受講生にとって重要な心構えを具体的にご教示いただいた。博物館をとりまく状況として、重大な問題とされている「指定管理者制度」について触れられた。

山崎先生からは、勤務館で担当されている普及活動の概要を述べられ、やはり博物館をとりまく厳しい状況に触れられた。

講演後、両先生から質疑応答の時間を頂戴し、講演内容のほか、学外実習の細かな点に

まで丁寧なお答えをいただき、有意義な事前ガイダンスであった。

終了後、受講生には学外実習のための事前説明をおこない終了した。

### 博物館実習Ⅱ(学外実習)

本年度の館務実習は、7月・8月を中心にしておこなわれた。受講生は文学部・短期大学部・科目等履修生を含めた17名(内訳は、文学部・大学院15名、短期大学部1名、科目等履修生1名)であった。実習館と実習生数は次のとおりである(「博物館学課程 2005年度」参照)。

実習終了後、受講生は各館で実習した内容と反省点をレポートにまとめて提出した。この内容は、次年度の「博物館実習Ⅰ」(学内実習)・「博物館実習Ⅱ」(学外実習)を含む本課程の検討にとって大切な資料となる。また受講生は別に「博物館実習Ⅱで学んだこと」というテーマの要旨も執筆後、提出して本年報(「博物館実習Ⅱ(2005年度)レポートから」)に掲載しているので、参照されたい。

最後に、本年もご多忙にもかかわらず、本学の実習生を受け入れていただき、ご指導を賜った各館の館長および学芸員、関係職員の皆様に厚くお礼を申し上げる。

### 博物館実習Ⅰ(学内実習) 夏期フィールド

本年の博物館実習Ⅰの夏期フィールドは、例年通り①「博物館等施設見学」、②「写真撮影実習」、③「古文書調査実習」の各1日の3日間として実施した。その後、受講生は、夏期フィールド参加レポートを提出した。

〔夏期フィールド〕

○7月31日(日)午前8時30分～午後7時30分

「博物館等施設見学」

引率：宮崎健司助教授・平野寿則専任講師

①大阪歴史博物館

②狭山池博物館

③歴史館いずみさの

○8月4日(木)午前10時～午後4時

「写真撮影実習」

場所：本学響流館博物館準備室兼実習室

指導：稲城正己臨時講師・宮崎健司助教授

○8月8日(月)午前10時～午後4時

「古文書調査整理実習」

場所：本学響流館博物館準備室兼実習室

指導：木場明志教授・草野顕之教授

本年度は初日に「博物館等施設見学」、2日目に「写真撮影実習」、3日目に「古文書調査整理実習」という日程となった。またおおむね3日間集中的に実施するのが通例であったが、今年度は授業日程や海外研修参加者などに配慮したため、分散しての実施となった。

1日目の「博物館等施設見学」では大阪府下の3館を訪問し、それぞれの概要等を懇切に説明いただき、施設や展観を見学した。通常立ち入ることができない、バックヤードの見学は受講生にとって新鮮であったようである。2日目は「写真撮影実習」である。前期授業での基礎知識の復習から、写真撮影の技術の初歩を講義したのち、一人ひとりが、その都度、カメラ・照明などのセッティングして、仏像などのレプリカの写真撮影実習をおこなった。最終日の「古文書調査実習」では、昨年度に引き続き「山城国笠置村万屋家文書」の調書作成と、目録作成のためのデータベース制作実習をおこなった

例年同様、本年の夏期フィールドも、多くの関係者の方々のご指導とご配慮をいただき、無事に3日間の実習を終了することができた。

#### 博物館実習Ⅱ受講生の展示実習

本年度は、昨年度に引き続き、博物館実習Ⅱ受講生による実習生展を、大谷大学博物館の秋季企画展「仏教の歴史とアジアの文化Ⅳ」にあわせて開催した。

昨年度は一つのテーマについて各班でコー

ナー分担をおこなって開催したが、本年度は各班で企画し、コンペをおこなって一つのテーマに決定する予定であった。しかしながら、いずれの班も興味深いテーマ企画を立てたため、3班がそれぞれ企画した3つの展示を実施することになった。詳細は以下の通りである。

〔実習生展〕

会期：9月6日(火)～17日(土)

会場：大谷大学博物館

内容：『『医』の歩み』(A班企画)

I 本草学

II 医学

III 解剖学

『君臣図像』

『本草綱目』

『大和本草』

『医心方』

『大同類聚方』

『医方大成論』

『重訂解体新書』

『医範提綱』

『西藏医学解剖図』

「異界のものたち」(B班企画)

はじめに

I 平安京を彩った怨霊・菅原道真

II 異界と通じた者・安部晴明

III 異界を制する者たち

『北野天神縁起』(複製)

『安倍晴明記』

『今昔物語集』

『古今著聞集』

『妖怪学講義』

『おぼけの正体』

『日本妖怪変化史』

「よみがえる京の町」(C班企画)

はじめに

- I 近世地誌編纂の展開
- II 巡礼記から辿る近世京都
- III 絵画としての町絵図
  - 『大明一統志』
  - 『山城志』
  - 『雍州府志』
  - 『京都名所旧跡霊佛霊社巡礼覚』
  - 『都名所図会』
  - 『拾遺都名所図会』
  - 『改正増補道中行程明細記』
  - 『諸国道中旅日記』
  - 『改正京都町絵図細見大成』
  - 『京都地図』

(博物館実習担当 宮崎健司)

## ■2005年度 博物館実習Ⅰ(学内実習) 授業テーマと内容

日程	授 業 テ ー マ	担当者	授 業 内 容
4/11	仏教資料取扱法 (序説)	宮崎健司	博物館実習Ⅰのねらいと展望(総論) 仏教文化財について
4/18	復習古文書	平野寿則	古文書読解実習
4/25 5/16	仏教遺物資料Ⅰ (仏教考古)	宮崎健司	仏教遺物資料(講義) 仏教遺物資料の取り扱い実習
5/23 30 6/6	仏教遺物資料Ⅱ (仏教民俗)	豊島修	仏教民俗・民俗資料(講義) 仏教民俗・民俗資料の取り扱い実習 仏教民俗・民俗資料の取り扱い実習
6/13 20 27	古文書 (近世・近代史料)	木場明志 草野顕之	近世・近代史料の種類(講義) 近世・近代史料の取り扱い実習 史料調査法
7/4	写真撮影実習	宮崎健司 稲城正己	フィルムの種類・機能及び撮影上の注意事項 撮影実習
7/18	夏期フィールド事前学習	宮崎健司	夏期フィールドの事前学習
7/31 8/4 8/8	夏期フィールド	木場明志 草野顕之 宮崎健司 平野寿則 稲城正己	博物館・美術館などの施設見学 博物館資料写真撮影実習 古文書調査実習
9/19 26	真宗史料	一楽真	真宗史料(講義) 真宗史料(聖典・絵画)の取り扱い実習
10/10 17	仏教文献資料Ⅰ (東洋仏典)	采翠晃	大蔵経の種類(講義) 漢訳大蔵経の取り扱い実習
10/24 31	仏教文献資料Ⅱ (漢籍中心)	浅見直一郎	漢籍・中国資料の概要 漢籍取り扱い実習
11/7 21	仏教文献資料Ⅲ (日本仏典)	沙加戸弘	日本書誌学の基本(講義) 仏教文献資料の取り扱い実習
12/5 12	博物館とマルチメディア	松川節	博物館における情報処理技術(講義)
1/16	博物館関係法規	宮崎健司	博物館関係法令の概要(講義)
1/23	総括	宮崎健司	本年度の反省と博物館実習Ⅱにむけて

■2005年度 博物館実習Ⅱ(学外実習)

実習館名(館長名)	実習期間	実習生名
彦根城博物館(石丸正運 館長)	7/5・7/18・27・30・31	林 智春
大阪城天守閣(中村 眞 館長)	7/25～7/28	浅井省二
池田市立歴史民俗資料館(田中晋作 館長)	8/3～8/7	清水 恵 玉川由佳
京都国立博物館(佐々木丞平 館長)	8/8～8/11	山下加那子 遠藤智子
栗東歴史民俗博物館(佐々木進 館長)	8/9～8/12	金子元紀 林 美和
大阪歴史博物館(脇田 修 館長)	8/22～8/26	森 さや香
京都市歴史資料館(井上満郎 館長)	8/23～8/26	駒井 雅
霊山歴史館(谷井昭雄 館長)	8/23～8/26	山内悟司 津組彩加
大津市歴史博物館(松浦俊和 館長)	8/23～8/27	町田一樹 寺本真悠
滋賀県立琵琶湖文化館(宮本忠雄 館長)	8/30～9/3	祐川 恵理
奈良国立博物館(湯山賢一 館長)	12/6～12/9	藤井政彦 笠井 豪

■学芸員資格取得者(2006/3/17付・第17期生)

〔大学院〕 藤井 政彦・金子 元紀

〔文学部〕 笠井 豪・林 美和・駒井 雅・清水 恵・玉川 由佳  
林 智春・町田 一樹・森 さや香・山内 悟司・祐川 恵理  
浅井 省二・津組 彩加・山下加那子

〔科目等履修生〕 遠藤 智子

(16名)

■博物館学課程単位修得者(2006/3/17付)

〔短期大学部〕 寺本 真悠

(1名)

## 2005年度博物館実習Ⅱ レポートから

12月6日から9日までの4日間、私は奈良国立博物館で博物館実習をさせて頂いた。講義形式で行われたこの実習は、工芸品・彫刻・絵画・書跡・考古の5分野を中心として、他の文化財修理や情報・図書館資料の整理と公開など多岐に亘る内容であり、各担当の学芸員の方々にご指導頂いたことは大変有り難いことであった。この4日間を通して私が学んだのは、資料の調査法や取扱いは当然のことながら、何より、学芸員になるに当たって、自らの専門分野が如何に必要であるかということであった。例えば、木造の仏像のように、品質・構造を理解していないと触れることすらできないことからそれが分かる。自分の専門性という土台の上に、どれだけのことを理解し、自分のものにして積み上げていけるか、これが非常に大切なことである。加えて、自分の専門性に磨きをかけていかなければならないことを痛感した。最後に、今回の実習でお世話になった方々に心から感謝したい。

大学院博士第2学年(仏教文化専攻) 藤井政彦

\* \* \*

私は滋賀県栗東市にある県立栗東歴史民俗博物館で実習をさせて頂いた。8月の上旬である。旧栗太郡一带の民俗資料を豊富に集めている博物館であり、室町期と思われる仏像から戦後まもなくまで実際に使用されていた農具まで幅広く収集していた。実習ではそのような民俗資料の調査が主体であった。勿論そのような経験も貴重であったが、私にとって最も印象的であったのは学芸員の方たちである。実習中、私は資料調査を通して数

人の学芸員と交流することができた。それによれば、それぞれの専門分野をもって研究にたずさわっており、実に生き生きと楽しそうに自らの研究について語ってくれた。たとえば、一つの質問に様々な角度から指摘をしていただき、本当に学芸員としての情熱が感じられた。そのような情熱に触れたのがまさに貴重な体験であったように思う。

大学院修士第2学年(哲学専攻) 金子元紀

\* \* \*

博物館には「公共性」と「採算性」という二つの面からの評価がなされ得る。「文化財を未来へ残す為の施設」としての側面、「来館者を集められるアミューズメント施設」としての側面が有るということだ。ここ数年の行政の方針で、今、博物館には後者の性格を強く持つことが求められるようになってきたらしい。今回、奈良国立博物館という、日本でも最大級の施設で実習させてもらって一番勉強になった事は、そのように、ある意味でターニングポイントを迎えている博物館という存在の未来像を、現場にたずさわる学芸員がどのように考えているのか、その生の声をたくさん聞く事が出来た事だと思う。実習自体は、他大学からも大勢の実習生が参加しており、講義形式でおこなわれたが、特色ある内容だったと言える。そして今回、日本の博物館のリーダー格とも言える館で現場の声に触れたのは、実に有意義であった。

文学部第4学年(仏教学分野) 笠井 豪

\* \* \*

8月9日から8月12日までの4日間、私は

栗東歴史民俗博物館で実習させていただいた。短期間ではあったが、館内・倉庫の案内や古文書の調査カード作成、民具の調査カード作成、仏像のそうじと測量など、内容は濃いものであった。取り扱う収蔵品は小さい物から唐すきのような大きく重たい物まであり苦労した。全てが大切な物であるから、取り扱いには、とても気を遣った。したがって、この4日間は、ずっと緊張の連続であった。4日間の実習を通して、一番感じたことは、学芸員の方々が、とても熱心にこの仕事に取り組んでいる姿であった。一つの質問に対して的確に答えてくれたり、文化財に関して様々な知識を教えてくれた。学芸員の仕事に責任が持てなければぜったいにできないことだと思う。安易な気持ちでは、やっていけない仕事だと、改めて実感した。

文学部第4学年(現代社会学分野) 林 美和

\* \* \*

大谷大学博物館学課程博物館実習生として、8/23~26の4日間、京都市歴史資料館において古文書及び美術・工芸品の取扱いを行い、学芸員業務の一端を経験させて頂いた。実習内容としては、文書調査の基礎作業である古文書の分類・整理といった作業が中心であったが、取り扱った勝林院文書には、中世文書や近世の口宣案等が含まれており、貴重な資料に触れるという学芸員の醍醐味が味わえ、感慨深い経験が出来たと考える。また、実習館が市史編纂といった調査機関としての活動を主としているため、私自身、学芸員が研究員であると考えた契機となった。つまり、学芸員は調査・研究を基礎として活動するため、まず研究者たる技能の修得が不可欠なのである。よって、「課程としての知識の修得」から「職業上の技能の修得」へと問題意識を転換し、取り組みをしてゆくことが必要だと考える。今後の課題としたい。

文学部第4学年(国史学分野) 駒井 雅

\* \* \*

私は池田市立歴史民俗資料館で、8月3日から7日までの5日間、実習させていただいた。実習では外国切手をエクセルへ打ち込む目録作成作業を主として、展示替えの見学や梱包作業の見学をさせていただいた。目録作成はとても地道な作業で、時間と根気が必要だと体感した。今回の実習で最も心に残ったのは、館長からお聞きした話であった。博物館の現状と、現在抱えている問題点、大型観光型博物館と地域型博物館の住み分けについて、現場の生の声を聞くことができた。そのおかげで、業務や技術といった点だけでなく、地域型博物館が担っている役割等を自分なりに考えることができた。また今回の実習では、他大学の学生の実習の様子や授業について、意見を交換することができた。最後にお世話になった方々に、貴重な体験をさせていただいたことを感謝し、お礼申し上げたい。

文学部第4学年(日本仏教史学分野) 清水 恵

\* \* \*

8月8日から11日までの4日間、京都国立博物館で実習をさせていただいた。実習は、展示替えの見学に始まり、桐箱の取扱、写真撮影、卷子・掛け軸の取扱、拓本など多岐に亘るもので、その中で実に多くの事を学ぶことが出来た。実際に学芸員の方からご指導いただく中で強く感じたことは、実習と実務の違いである。例えば拓本実習では、通常の方法とは別に、より早く拓本を採ることの出来る方法もお聞きした。実際に調査に行つて短時間で何枚もの拓本を採らなければならない場合におこなうこともあるそうだ。今までは事前に知識を多く持つことが最も重要だと思っていたが、今回の実習を通し、経験も同じように重要であり、経験を通して知識を得ることもあるのだと感じた。最後に、実習期間中



お世話になった尾野先生に心から感謝したい。

文学部第4学年(国史学分野) 玉川由佳

\* \* \*

私は彦根城博物館にて6日間、実習させていただきました。実習内容は「はくぶつかんへ行こう・スペシャル」紋切り・茶の湯体験のサブリーダー、及び、そのための立案・資料づくりといった準備作業である。この実習からは、茶の湯体験を通して、子供たちに何を伝えたいのかを明確にし、必ず何か一つを伝えるということが大切であることを学んだ。そして「伝える」ということの難しさを実感した。また、文化財の収集・保存・展示・調査などの業務に加えて、博物館へ来てもらう「きっかけ」づくりや文化財を次の世代に伝えていくことも、学芸員にとって重要な役割の一つであることを学んだ。子供との交流を通して、違う視点にたつて物事を考えていくと、新たに見えてくるものがあるということに気づかされた。それと同時に、先入観にとらわれてはならないということについて考えさせられた。ほんの一部とはいえ、学芸員の仕事に携わることができ、大変有意義な実習であった。

文学部第4学年(日本仏教史学分野) 林 智春

\* \* \*

私は大津市歴史博物館で8月23日から27日の5日間の日程で実習をおこなった。掛け軸・屏風・巻子の取り扱いでは、屏風を広げるときは摩れない様に少しだけ浮かすこと等、作業の随所に留意点があった。特に掛け軸や巻子を平行に巻く作業が難しく、このような作業は積み重ねによりなれていかなければならないことを感じた。また館外で坂本の寺院での現地実習もあった。その際、版木の取り扱いでも様々な注意点があったが、学芸員が実際に現地で文化財の調査をおこなう時と

同じ様な環境でおこなった事も重要だったと思う。各種文化財や展示保存に関する講義の他、収蔵庫等の見学では資料に対する様々な配慮がみられた。一方で運営面で博物館が厳しい現状におかれている事も知り、やはり経営面で積極的な働きかけをしなければ維持できない事も感じた。今回の実習では様々な知識を得た他、学芸員には多くの要素も必要である事も学んだ。学芸員を目指す上で今後活かしていきたい。

文学部第4学年(東洋史学分野) 町田一樹

\* \* \*

大阪歴史博物館で8月22日、24日から26日の4日間実習に参加した。内容は博物館の普及事業、広報の役割、展示などについて教えて頂いた。大阪歴史博物館は3年前に新しくオープンし、今もなお試行錯誤しながら「市民参加」の展示を目指しているということだ。実習は講義を中心におこなわれ、一つの館の現状から広報の実態、今後の目標などを教えて頂き、深く考えることができた。博物館において一番大変なのは「利用者と学芸員の意識の差」であった。利用者が望むことを博物館は完全に実現はできず、館の目的が必ずしも利用者に伝わるとも限らない。そうした中で、「できることから」「小さなことから」、利用者に歩み寄る館の姿勢は印象的であった。こうした取り組みは、今後の博物館において、大変重要なことであると感じた。今日、博物館は、利用者の減少をはじめ様々な問題をかかえており、厳しい現状に置かれているが、まだ展示のあり方・工夫などを通じて、変わっていきける可能性は充分にあると思う。

文学部第4学年(日本仏教史学分野) 森さや香

\* \* \*

私は8月23日から26日までの4日間、霊山歴史館で実習をさせていただきました。実習内容

は、講義、ビデオ鑑賞、掛け軸・刀剣の取り扱い実習であった。霊山歴史館の広報についての講義では、現代人の博物館離れを防ぐために、デジタルメディアの使用による宣伝や子供向けの歴史体験教室など、様々な工夫をしておられることを知った。掛け軸・刀剣の取り扱い実習では、刀剣の手入れなど、博物館実習Ⅰでは行うことができなかった実習をさせていただき、非常に貴重な体験となった。私は、今回の実習で、歴史や文化財を後世にしっかり伝えていくことが学芸員の責務であるということを知ることができた。最後に、お世話になった霊山歴史館の方々に心から御礼申し上げたい。

文学部第4学年(国史学分野) 山内悟司

\* \* \*

私は8月30日から9月3日までの5日間、滋賀県立琵琶湖文化館で学外実習を受けさせて頂いた。レプリカではなく、本物の重要文化財に触れ、実際にその調書を作成したことや、大谷大学にはあまり所蔵されていない絵画・工芸資料を間近で目にし、その取り扱いを学べたことは、本当に勉強になった。また、9月1日・2日の両日に行われた園城寺勧学院聖教調査では、典籍の撮影の基礎を学びながら、作業に従事した。その後、国宝の金堂の屋根に登らせて頂いたことは、私の一生の思い出になるであろう。学芸員の方、園城寺の責任者の方、そして宮大工の方々の貴重な講義や体験談を通して、私は改めて「文化財に接する者の心構え」を確認し、人間としても一回り大きく成長することができた。実習の成果を今後によく、生かしてゆきたい。

文学部第4学年(国史学分野) 祐川恵理

\* \* \*

平成17年7月25日から28日の4日間、学外実習へ行くことができた。場所は大阪のランドマークとなっている大阪城天守閣。私は、

その中で働く学芸員の数に衝撃を受けた。なんと4人なのだ。関西のテレビ番組を見ていれば月に一度はその姿を目にするであろう大阪城天守閣。また、国内・海外から、観光で訪れる来館者の数が非常に多いこの施設において、展示・構成・解説を考え、出版物の作成をおこない、寄せられる疑問や質問に対応・回答するなど、館の仕事の中心となる学芸員が4人なのである。しかも、その4人の学芸員で約2ヶ月毎に展示替えをおこない、講座などの学習会を開いたり、大阪城を中心とする催しには、ブースを出して参加するなどの活動もおこなっている。また文化財の管理や資料の管理もしなくてはならない。今回の学外実習を通して学芸員の仕事の社会的役割、その重要性を実感することができた。

文学部第4学年(国文学分野) 浅井省二

\* \* \*

私は8月23日から26日までの4日間、霊山歴史館で実習させていただいた。実習内容は、霊山歴史館についてのビデオ鑑賞や広報・会計についての講義、梱包や文化財の取り扱い実習であった。博物館の広報についての講義では、館の運営に関する仕組みを学んだ。大学で受講した博物館経営・情報論を具体的に体験することができ、さらに理解が深まったと思う。また、博物館運営が厳しい状況の中、博物館ボランティアが今後大きく期待されていることを知った。博物館は知的財産を後世に伝えていくことが目的であり、様々な可能性を考えていくことの必要性を学んだ。資料の取り扱い実習では、文化財に対する歴史の重さを感じ取り扱うことを考える機会となった。私は、今回の実習で多くのことを深く学ぶことができた。この経験を今後につなげていきたいと思う。

文学部第4学年(国際文化学分野) 津組彩加

\* \* \*

私は京都国立博物館で実習させていただいた。実習内容は、幅広く色々な事を体験・実習・見学・学習させていただいた。その中で、文化財の調査及び記録として資料保存に大変有用な一眼レフカメラについての講義と実習は大変勉強になった。学習後の本館写場での撮影見学において、私自身も文化財を撮る側の視点でもって観察することが出来たからである。ひとつの資料に、写真を撮る側と文化財をどう見せたいかという見せる側の両面の視点を味わうことができたのは、本当に貴重な体験であったと思う。また、実習中特に感動したのは、博物館のバックヤードで、実際に中心となって仕事をされる学芸員の方々の熱意である。とくに指導担当の尾野先生からは、学芸員のめざすべき研究意欲やあるべき姿をご自身でもって示されているように感じた。最後に指導して下さった尾野先生や館の方々に心から感謝し、御礼申上げたい。

文学部第4学年(国際文化学分野) 山下加那子

\* \* \*

京都国立博物館での博物館実習で私は、学芸員の仕事を尾野先生のもと、4日間学ばせて頂いた。実習中、私は普段見ることのできない展示会場の裏側や、展示替えの様子、展示品の貸し借りの様子等を見せてもらい、本当に勉強になった。実習中に一番感じたことは、文化財を第一に考えているということだ。収蔵庫・展示室は勿論のこと、文化財が移動する通路には全て気が配られており、万一の事故もないように注意が払われていた。文化財など、今に伝わるものを未来にそのまま伝えることも、博物館の大事な仕事なのだと実感させられた。また、尾野先生のお話から、物事の原理を理解することの大切さも学んだ。学芸員には、柔軟性も必要だそうで、臨機応変に対応することが求められるそうだ。この4日間お世話になった尾野先生を

はじめ、博物館の方々には本当に感謝している。この実習で学んだことを忘れずに、この経験を今後活かしていきたい。

科目等履修生 遠藤智子

\* \* \*

8月23日から5日間、大津市歴史博物館にて実習をさせていただいた。館長の講義から始まり、実践と講義を交えながらの実習を経験することができた。実習内容は、大津市歴史博物館ができるまでの過程を中心とした講義をはじめ、掛け軸・屏風・巻物の取り扱いや、次回の企画展の設営などをおこなった。また館外実習では寺院に行き、寺院に所蔵される版木の拓本・調査をするなど、多種多様な実習であった。大学で学んだ知識だけでは通用しない面も多々あり、知識・体力・柔軟性が、学芸員に求められているのだと改めて知ることができた。この実習において最も学んだことは、文化財に「愛情」を持つということが学芸員にとって必要不可欠なことだ。学芸員としての意識の大切さを実感でき、充実した5日間だった。この貴重な体験をさせていただいた館の方々に心から感謝している。

短期大学部第2学年(文化学科) 寺本真悠